

になって職員が関わる時間のほうが多くなってしまいう状況でした。

横山さんは重度の知的障害と自閉症があり、誘いかけられるだけでパニックを起こします。朝、太陽の家にやってきて玄関の椅子に座ったらもう動きません。職員が仕事に誘っても口を真一文字に結んで強い拒否を示します。さらに誘うと大声を上げてパニックになります。二人とも仕事どころではありません。

二人の様子を観察し、情報を集めてみると絵を描くことが好きであることがわかりました。ためしに、絵を描くことに誘ってみると、すんなりと参加してきます。何よりも驚かされたのは、それまで職員が用意した仕事では決して見せなかった、生き生きとした表情で絵を描き続けたことでした。絵画は、ウエス作業や缶プレス作業に比べてはじめと終わりがわかりやすいわけでもない、基本的に一人作業なので集団の中の役割がわかりやすいわけでもない、でも生き生きとやり続ける姿がそこにはあったのです。自分が筆やペンを持ち白い紙に描いていくことで色や形が生まれ、その質の変化に気持ち喚起されているようでした。

(5) これでいいのだろうか

——新たに直面した2つの問題——

(a) 仲間の姿から

「量の見通し」「役割の見通し」「質の見通し」の3つの配慮点をうまく組み合わせることで、重い障害のある仲間たちでも労働に参加するめどが立ってきました。しかし、職員集団の中に新たな問題意識が芽生えました。「仕事に参加できるようになったものの……」というおもいです。

様々な工夫と配慮で労働参加が可能になったものの、仲間によってはあつという間に仕事を終えてしまい、かといって次のステップが生まれてきません。仲間の様子といえば、「やってしまえばいいんですよ」というおもいがありありと表情からうかがえました。

現在絵画を仕事にしている横山さん。太陽の家に通い始めたころは、仕事の誘いには何でもかんでも拒否。大声を上げる。暴れる。パニック。何とか作業室に入れようと男性職員数人で抱え上げたら、服を脱いでまでも抵抗。「手先は器用なのでハサミを使ってウエス作業をしてもうしかないよね、作業室に入ってこれないのなら、職員が行けばいいか」と横山さんがこもっている個室に職員が行って「さあ仕事だよ」と声かけをしていました。あつという間に決められた枚数は切ってしまい、仕事はするものの「今日もがんばったね、お疲れさま」と声をかけると大声を上げるか無視されるか、いっこうに横山さんとの関係が良くならず……。

「これはがんばることの強要ではないか」と職員間で悩みました。「何かをさせると考える前に、横山さんを知ろう。とにかく仲良くなろう」と決め、よく散歩に行きました。すると花の名前を聞くと答えたり、歌を頼むと歌ってくれたり、この発見をみんなで共有しました。ある時小さな紙にラクガキをしている姿を見て、「お祭りのポスターに絵を描いて」とお願いすると、拒否せず、すんなりと描いてくれたことをきっかけ



けに「もうこれを仕事にするしかない」という発想が生まれました。

「仕事に参加できても、生き生きしているわけではない。つまらなそうな表情。何か違和感がある」そんなことが職員の話し合いの中でよく出るようになってきました。つまり、参加するための方法論ではなく、参加している仲間の有り様が大きな課題になっていったのです。

(b) 社会の評価から

太陽の家でもいわゆる「内職」を仕事にした時期がありました。バブル景気の頃は、太陽の家のような障害の重い仲間が多数いる施設にまで仕事の依頼がありました。主に行ったのは「鍋敷き作り」です。丸い木の板に、ボンドを使いコルクボードを貼る仕事でした。一人ひとりの量をグラフにして示したり、ホームセンターで売られている鍋敷きをみんなで見に行ったりと、それなりのとりくみが行われていました。ところが、バブルがはじけた途端、一切の仕事が来なくなってしまいました。業者から「太陽の家は遅くて、量ができなくて、正確ではない。経済の仕組みから見れば一番困る施設なんです。同じ人件費、同じガソリン代を使って材料を納入するなら、短時間で正確に出来なくては困ります」と言われてしまったのです。「いまさら、訓練をして業者が言うような実態になることはない。それなら、仲間一人ひとりが自分らしく関わって仕事になるものを探そう」という議論が行われました。

2 表現活動を仕事に

(1) 仕事に仲間を合わせるのではなく、仲間に合わせた仕事を見つけよう

—— 絵画（表現活動）は仕事になるのか？ ——

職員会議では長い日数をかけて話し合いました。

「絵画でお金を稼ぐなんて無理なのではないか」「幼稚園のお絵かきとどこが違うのか」「障害が重い人に絵を描く仕事なんて見通しが立たなくわかりづらいのではないか」「好きなことだけしている仕事なんてない、仕事はつらいこともあると教えるべきなのは」、並行線の職員会議が続きました。従来の仕事と違ってわかりずらく本当に表現活動が仕事になるのか、誰もが半信半疑だったと思います。施設長が「みぬま福祉社会が考える労働の定義、社会とつながる、お金を稼ぐ、仲間の発達につながる」を満たせば仕事と認めよう」と、そんな助け船を出してくれ、絵画や織りなどの表現活動が仕事としてスタートしました。

仕事に仲間を合わせるのではなく、仲間に合わせた仕事を見つけよう。自分らしさを表現することも仕事になるのではないか。従来ある仕事の中でできることを見つけ教え込んでできるようにするのはなく、本人

